

シンポジウム／「口承文芸研究の再編成」

口承文芸研究の再編成に向けて

川森 博司

二〇一一年度の大会シンポジウムには「口承文芸研究の再編成」をテーマとして選んだ。「再編成」という言葉に込めた趣旨は、「口承文芸」という問題設定は現代社会においても有効性を持っているが、それを活かしていくためには、口承文芸の研究対象を対面的な状況における口頭の言語伝承から拡大していく必要がある、そのためにはどのような構えが必要かを検討することであった。

さらに、もう一つのねらいとして、現在における口承文芸のフィールドワークのありようを再検討することがあった。現在の状況に対応した研究をおこなうためには、従来とは異なったフィールドワークのモデルが必要なのではないか。それは、二者の対面的な状況から見ると、「媒介」を経た状況のフィールドワークと違ってよいだろう。その媒介は怪談本という書物であったり、町おこしのための観光施設であったり、レコードであったりする。そのような媒介を含んだフィールドワークをどのように展開するのかわかるのが、もう一つの問いかけたい課題であった。

このような問題意識は、一つは、一九九六年の大林太良による公開講演「人類文化史における口承文芸」（第二〇回口承文芸学会大会）における問題提起に由来している。大林は講演の結びの部分で「客観的に考えてみると、口承文芸はその歴史的使命を終え、口承文芸の時代はすでに終わったか、あるいは終わりつつある、というのが事実ではないかと思えます」と述べた。そして、その理由として、大林は「口承文芸の個々のジャンルを担って来た社会的集団、あるいは社会の層というものがなくなってしまったこと、あるいは変質してしまったこと」と

「みんなが文字を使うようになったこと」を挙げている（大林一九九七 二四）。この大林の主張は真剣に考慮すべきものであると筆者は受けとめた。この口承文芸の終焉の主張から、現在進行形の口承文芸の時代は終わり、現在の課題は「もと口承文芸」の記録を研究することであるという立場が出てくる。たしかに、これも口承文芸学会において重点的に取り組んでいくべき課題であることは間違いない。しかし一方で、「口承文芸」という研究の視点は、現在進行形の研究対象についても有効なものではないか、と筆者は考える。たとえば、大衆文学と口承文芸の境界線を、観光用の各種メディアに記載された伝説と口承の伝説の境界線を、録音された音声資料と文字に記述された口承資料の境界線を、それぞれ再交渉していくことによって、新たな研究の領域が見えてくるのではないだろうか。このような方向性において「口承文芸」という視点の有効性を問うことが、

このシンボのねらいの第一である。

もう一つ、「再編成」という問題意識については、「口承文芸研究」第三号所収の野村典彦の書評に触発された。その結びの部分で野村は「文学的想像力によっても口承文芸研究の再編が企てられるべきではないのか」と述べている。この発言の前提には、益田勝実や石母田正や西尾光一の説話文学論から抽出した口承文芸観がある。「柳田の「口承文芸」を受容した戦後の説話文学研究の底辺に、「貴族」と対峙する「階級」についての議論があり、「庶民」がいきいきと行動する「人間らしさ」の追求があった」と野村はまとめている「野村 二〇一〇 一七〇」。実はすでに、先の大林の問題提起を受けて、口承文芸学会ではさまざまなレスポンスが試みられてきている。その一つとして、口承文芸から「文芸」をはずして、「口承」という問題設定から考えていこうとする立場がある。たとえば、高木史人は「口承研究」という研究の枠組みを次のように提唱している。

「語り手や話し手や歌い手とそれを聴聞する人との間に起こる動態を分析するのが、「口承研究」だろう。それと同時に、「口承」というメディアは、さまざまなメディアに、日々取り囲まれて生かされてきた。現在でも、多くのメディアを介して人々が繋がっている。たとえば、川田順造の「情報伝達性」「行為遂行性」「演技性」などの送り手の行為を説明する語が想起される。同時に、送り手と受け取る人の関係性―パフォーマンスが想像される。その輻輳するメディア状況の中で自らの身体をもその連鎖に繰

り込みながら、「口承」の動態を分析するのが、筆者のいう「口承研究」である。」「高木 二〇〇四 一五六」

これは一つの有力な研究方向であると筆者は考える。「文芸」という言葉によって固定的な研究対象に拘束されることから逃れて、研究対象を拡大していくことができるからである。しかし一方で、文字の文芸（大文字の文学）に対して、口承の作品も「文芸」であるという主張に込められた問題意識のほうにも、現代的な課題が残っていると筆者は考える。その意味で、野村典彦の「文学的想像力によって口承文芸研究を再編する」という呼びかけに反応したのであった。

先の大林講演を受けての討論で、小澤俊夫は「口で語るといふことの研究はほとんど行われていないということ」を認めざるを得ない。具体的には言葉遣い、話の構成、文章のリズムがどうか、という内部の様式についての研究は行われていない」という発言をしている「小澤他 一九九七 二九」。「口承研究」が外部の状況（コンテキスト）に重点を置いた研究をおこなうのに対し、それを補うものとして、「内部の様式」に重点を置いた「口承」の研究もまだまだ必要であり、それを囲炉裏端の昔話のような、かつての状況においてではなく、現代的な状況において、古典的なジャンルのゆらぎを見据えながら、検討すること。それが、このシンボの組織者である筆者が、口承の作品も「文芸」であるという柳田国男の問題設定を引き継いでいこうとした道筋であった。

このような意図のもとに、比較的若い世代の三人に報告をお

願いした。まず、飯倉義之は、「怪談」を「談」（ハナシの文芸）として捉えなおすことを試みた。民俗学において「怪異」は、心意現象部門の「俗信」の事例として扱われてきた。つまり、「語られ方」よりも語られた内容に重点が置かれたのである。それに対して、「語られ方」に焦点を当てる学としての「口承文芸学」の役割を飯倉は示したものと思われる。

次に、加原奈穂子は、吉備路における桃太郎伝説の活用を事例として、口承文芸がさまざまな側面に応用される状況に取り組み研究方向を示した。岡山において「桃太郎の地域シンボル化」「伝説の定型化と簡略化」が進行していることを指摘する一方で、文化財担当部署と観光担当部署の間に史跡活用をめぐる考え方の違いが生じていることに注意を喚起した。口承文芸が再利用されていく状況には、現場を訪ねてみて初めてわかることが多く、従来の口承文芸の採集とは異なる、新たなフィールドワークのあり方が必要とされることを加原発表は示唆していた。

最後に、真鍋昌賢は、浪花節のSPレコードを素材にして、浪花節の「声」の受容のされ方を検討した。SPを聞き、それが記録された稽古本をもとにして、また「声」の芸が再生産されていくという入り組んだ状況の分析を「語り芸研究」に組み込むことによって、総合的なメディア文化の展開の中に「口承文芸研究」を位置づけていく方向性を真鍋は指摘した。

以上、三者の発表から、「語られ方」に注目する口承文芸研究の視点の必要性が、改めて浮き彫りにされたものと考ええる。フロ

アとの間では、現代的な状況におけるフィールドワークのあり方に特にそこで研究者の果す役割と、口承文芸の「文芸」という側面の捉え方について、熱い議論が交わされた。研究者の現場への関与については、否定的な形で巻き込まれることを憂慮する旨の意見が多く出されたが、どのようなことが否定的なのかということ自体、地元の視点から再検討していく必要を感じさせられた。また、文芸という言葉の捉え方をめぐって見解の相違が見られたが、口承文芸学会においては、表現のレベルにこだわった検討が欠かせないという方向性は示されたのではないかと思われる。問題は、何を研究対象として取り上げるかということになるが、そこに「口承文芸の再編成」の課題があるといつてよいであろう。今後の議論の展開・発展を願っている。

【参考文献】

- 大林太良「人類文化史における口承文芸」「口承文芸研究」
二〇、一九九七年
小澤俊夫他〈討論〉「口承文芸研究の課題」「口承文芸研究」
二〇、一九九七年
高木史人「昔話研究者と身体」「口承文芸研究」二七、二〇〇四年
野村典彦〈書評〉笹原亮二編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学―』、小池淳一編『民俗学的想像力』『口承文芸研究』三三、二〇一〇年

（かわもり・ひろし／神戸女子大学）